

〈建てること〉と〈住むこと〉についてのハイデガーの思索

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山本, 英輔, Yamamoto, Eisuke メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00061925

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



〈建てること〉と〈住むこと〉についての

ハイデガーの思索

山本 英輔

はじめに

ハイデガーの「建てること、住むこと、思索すること」は、後期ハイデガーのテキストの中で注目されることが多く、重要なもの一つであると言える。これは、以前から建築学のほうでも取り上げられてきたものであった。実際このテキストは、1951年にダルムシュタットにおいてドイツ工作連盟の主催で行われた会議の講演が基になっている。この会議のテーマは「人間と空間」であり、ハイデガーの講演も（オルテガの講演もあわせて）、建築の専門家や建築に関心のある市民の前でなされた。日本ではここ 10 年あまりの間で翻訳が数種類もなされたのであるが¹、このことは、このテキストの重要性と魅力、関心の広さを間接的に示していると思われる。

もっとも、その内容は決して平易であるわけではない。その理由は、後期ハイデガーの独特の用語がちりばめられ、その語りが何かひとを煙に巻くようなところがあるからであり、またそれだけではなく、問いが多重で思索の筋道が分かりにくい点もあるかと思われる。ハイデガー自身が最初に設定する問いは二つ、「1. 住むこととは何か」と「2. 建てることはどこまで住むことに属しているのか」であり(GA7, 147)、これらの問いに応じて、IとIIの2節構成になっているのであるが、その中に幾重もの問いが差し込まれ、会議の共通テーマに対応する、人間と空間とのかかわりについての考察も後のほうでなされたりしている。

筆者は以前、このテキストを材料にして論考を行ったことがあるのだが²、しかし扱ったのはこのテキストの一部であり、限定されたものであった。本稿ではあらためてこのテキストに集中して、ここで展開される哲学的思想を再考してみたいと考える。その際、ハイデガーの思索の道筋を辿りながら、このハイデガーの思索を通して、人間と空間とのかかわりはいかなるものと考えられるようになるのか、またその場合の「空間」とはどのようなものか、そして、空間の成立にかかわる「建てること」はどのような意義を持つのかを明らかにしたい。

1. 存在=住むこと

まず、ハイデガーが立てた最初の問い、「住むこととは何か」を念頭に置きながら、前半のIでの思索の流れを、そのポイントを絞りながら、瞥見してみよう。

普通私たちは、「住むこと」と「建てること」を別々の活動とみて、「住むこと」を目的とし、「建てること」がその手段としてあると考える。しかし、ハイデガーによれば、建てることは、住むことのための手段や方途にすぎないのではなく、「建てることはそれ自体すでに住むことなのである」(GA7, 148)。では、こうしたことを誰が語るかといえ、ハイデガーは「言葉」のほうからであると言って、「建てる」という言葉の意味を確かめる。

ハイデガーによれば、《bauen》の本となる古高ドイツ語の《buan》は、「留まる、滞在する」という意味での「住む」という意味である(GA7, 148)。今日、「住む」というのは、我々の様々な振舞いの内の一つだと考えられている。しかし、「建てることは根源的には住むことなのである」(GA7, 149)と言う。彼は、《ich bin (私は存在する)》の《bin》が古ドイツ語の《bauen》に由来することから、私が存在するというのは、私が住むということの意味するのだと主張する。人間で「ある」というのは、死すべきものとして大地の上存在するということであり、「住む」ことであると(GA7, 149)。

ところで、周知のように、人間の存在を「住む」という意味において捉えようとするのは、すでに『存在と時間』(1927年)でもあった。そこでは、《in》という語が《innan》に由来し、「住む(wohnen)」「居住スル(habitare)」「滞在する(sich aufhalten)」を意味することなどから、「私がある」は、「…のもので、つまり、これこれしかじかに親しまれているものとしての世界のもので住んでいる、滞在していることである」(SZ, 54)とされていた。このような語源の指摘は、主観-客観図式、そして事物的存在という存在了解を批判するという意図でなされていると解されるが、後期のこの講演においても、それは貫かれていると思われる。存在するとは住むことであるという考え方は、「我在り」ということを「我思惟す」ということで保証するのとは違う発想、言い換えれば、純粹自我、近代的な主観性ではない、人間存在の理解である。「人間は住むかぎりで存在する」(GA7, 149)という文言は、そのような意味合いをもつものとして理解することができる。

さて、《bauen》というドイツ語には、(農作物などを)「育む(pflegen)」「colere,cultura」という意味と、(建物を)「築く(errichten)」「aedificare」という意味があり、「住む」というこの古い意味は、「育む」や「建築する」という派生的な意味の背後に退いて忘れられてしまうのだとハイデガーは言う(GA7, 149)。しかし、彼はその事態を、言葉の意味の変遷という事柄にすぎないのではないと考える。この語義の変化に関して、「住むことが人間の存在として経験されていない」(GA7, 149)、「住むことが人間存在の根本動向としてまったく考えられていない」(GA7, 149f)という点を問題にするのである。

そこからハイデガーは、住むことの本質はどこにあるかと問い、これまた語源から考えようとする。彼によれば、ゴート語の《wunian》は、「満ち足りていること」、「平和へともたらされること」、「平和のうちにとどまること」を意味しており、「平和(Friede)」とは、「自由な開けた場(das Freie)」であり、「自由にする(Freien)」は、本来「大切に守ること

(schonen)」という意味である(GA7, 150f.)。「大切に守ること」は、積極的なところがあり、それは、或るものをその本質のうちへと戻して匿い、囲うことである。こうして、ハイデガーは、「住むことの根本動向は、この大切に守ること(Schonen)である」(GA7, 151)とするのである。

さらにハイデガーは、この根本動向が「住むこと全体的な広がりにおいて貫徹されている」(GA7, 151)とし、この全体的な広がりについて、後期思想で有名な「四方域(Geviert)」を持ち出して示すのである。すなわち、人間が住むのは「大地の上に」であり、「天空の下に」でもあり、さらに「神的なものの前にとどまる」ことであり、「人間の相互関係に属しつつ」でもある。存在するものを支える「大地」、この世界の開けとしての「天空」、神性の使者である「神的な者たち」、そして死を死として能くする「死すべき者たち」(人間)、これら四者が織りなす統一態が四方域である。「大切に守ること」という根本動向は、この四方域の全体にかかわるというわけである。「死すべきものたちは、彼らが四方域をその本質において大切に守るという仕方、住むのである。したがって、住みつつ大切に守ることは、四重なのである」(GA7, 152)。それなので、大切に守るとは一体何を守るのかと言えば、それは四方域であり、「四方域をその本質において保護すること(das Geviert in seinem Wesen hüten)」(GA7, 153)ということになるのである。

したがって、大切に守るというあり方は、四者それぞれに対する形がある。まず、大地を「救う(retten)」ということ(「救う」とは、「或るものを、その固有の本質のうちへと解放すること」(GA7, 152)だと言う)、つぎに、天空を「迎え入れる(empfangen)」ということ、さらに、神的なものたちを神的なものたちとして「待望する(erwarten)」ということ、そして、死を死として能くするという人間の本質に、この能力の慣わしのうちへと「付き添う(geleiten)」ということである(GA7, 152f.)。いずれも、かかわるものに対して直接的な介入を行うことではなく、また支配しコントロールすることではなく、受容的な態度であると言ってよい。こうした態度において、住むことが「生起する(sich ereignen)」(GA7, 153)とハイデガーは語る。

およそ以上のような論をみれば、ハイデガーの掲げた最初の問い「住むこととは何か」については、——もちろん、さらに問うべき事柄であることには変わりないが——ある一定の「答え」は与えられた。つまり、「住むこと」とは、根源的な意味における「建てること」にほかならず、それは人間が「存在すること」であり、大地・天空・神的な者たち・死すべき者たちの四者をその本質において「大切に守ること」であると。

では、「大切に守ること」としての「建てること」は、どのように遂行されるのか。それは物においてであると、ハイデガーは語る。「住むことは、むしろ、つねにすでに、諸々の物のもとに滞在することである(ein Aufenthalt bei den Dingen)」(GA7, 153)。「大切に守ることとしての住むことは、四方域を、死すべきものたちが滞在するところ、すなわち、諸々の物において(in den Dingen)、保管する(verwahren)のである」(GA7, 153)。あまりに自明なことかもしれないのだが、私たち人間が住むということには、諸々の物が必要で

ある。それは、単に生活の用をなすためにだけでない。人間はそもそも、つねにすでに、物のもとに滞在しているのである。物ぬきの住むことはありえない。この点に、この講演の思索の重要なポイントがあると思われる。「住むことは、四方域の本質を諸々の物へともたらすことによって、四方域を大切に守る」(GA7, 153)。四方域を大切に守るといふ方は、あえて言うならば、物とのかわりにおいて「具体化」されるのである。次節では、この物に関する発言に注目しながら、以降の思索の展開を追ってみる。

2. 建てられた「物」

この講演の二つ目の問い、「建てるのが住むことにいかに属しているか」は、後半のIIの節で扱われる。しかし、ハイデガーは、この問いに答えることが「建てるとは本来何か」ということを解き明かすこととなるのだと言う(GA7, 154)。つまり、二つ目の問いは、ずばり「建てるとは何か」を問うことにほかならないのである。そして、その問いに関しては、物を「築く(Errichten)」という意味での建てることに限定した上で、「建てられた物とは何か」という問いから始める。そこで、建てられた物の例として「橋」が選ばれているのである。

彼が持ち出す「橋」は、川の上にかかる橋のことで、兩岸にある道を結びつける通路として機能を果たすものである。しかし、橋はそのような機能につけるわけではない。ハイデガーは、橋によって、こちらの岸と向こう岸とがくっきり浮かびあがり、兩岸が川の流れとともに近いものとなると考え、橋は大地を風景として「集約する」のだと言う(GA7, 154)。たしかに、橋という建造物は、とりわけ遠くから見ると、その周りのランドスケープを際立った形で見えるようにさせるというのは分かりやすいことであろう。だが、それだけでない。橋は、流れを天空に割り当て、死すべき者たちに道を提供し、日暮のことや災いを乗り越えて神的な者たちの救いのほうを示してくれる、とハイデガーは見る。「橋は、それなりの仕方、大地と天空、神的な者たちと死すべき者たちを、自らのもとへ集約する」(GA7, 155)。この発言から明らかなように、橋は、いわゆる近代的科学的な物体として考えられるものではないし、人間にとって役立つだけの単なる道具として考えられるものでもない。すると、橋はシンボルや何かの表現であるようにも思えるわけであるが、しかしハイデガーは、「集約(Versammlung)」というのが橋の本質であると考えているのである。「集約」という語は、ハイデガーが以前からギリシア語のロゴスの根源的な意味として用いているものであり³、纏まりであり、秩序であり、この講演の文脈においては、人間の世界(四方域)を秩序づけ整える働きであると理解することができる。

この集約という働きとともに語られるのが、空間にまつわる語である。

もちろん、橋は、固有の種類の一つの物である。というのも、それは、四方域の一つの場所(Stätte)を許すという仕方、四方域を集約するからである。だが、それ自身一つの処(Ort)であるようなものだけが、一つの場所を明け渡す(einräumen)ことができる。(GA7, 156)

この引用文にあるように、橋が四方域を集約するというのは、四方域に場所を許すという仕方であると言うのである。この「場所(Stätte)」という概念についてはほとんど説明がないのであるが、四方域が成り立つ場所という程度の意味で理解しておこう。「大地」「天空」「神的な者たち」「死すべき者たち」全体が秩序づけられるためには、それらの場所が必要となるということであろう。そしてその場所を明け渡すことができるのは、「処」であるものとされる。この《Ort》という語は、O.F.ボルノウによれば、「点的」で「指し示すことのできる」⁴ものであり、「一定に布置され」、「正確に固定されている地点」⁵のことであり、「指示的性格を保持している」⁶のものである。ハイデガーも、「詩における言葉」(1952年)で、この語について述べている。処は「槍の穂先」を意味しており、「この穂先にすべてが集中している」(GA12, 33)。「処とは、そこへと最高にまた局限にまで集約するものである」(GA12, 33)、と。講演「建てること、住むこと、思索すること」では、このような、際立った、先鋭的な場としての処が、「場所(Stätte)」を与えると繰り返して述べられる。「橋は一つの物であり、四方域を集約するのであるが、それは四方域に一つの場所を許すという仕方、集約するのである」(GA7, 156)。そしてさらに、「この場所に基づいて、広場(Plätze)や道(Wege)が規定され定められ、それらの広場や道によって、一つの空間(Raum)が明け渡される(eingeräumt wird)のである」(GA7, 156)と言う。この場合の空間は、ある限界(ペラス)へと「明け渡されたもの(Eingeräumtes)」、「開放されたもの(Freigegebenes)」(GA7, 156)のことであって、決して無限な空間、近代的空間ではない。

以上のように、物である「橋」は、際立った「処」となり、四方域に場所を許し、そして、そのような場所が空間を明け渡すという議論をハイデガーは行う。一般的には「空間」の内に「処」があるのであり、「空間」は「処」に対して「上位に立つもの」⁷と考えられるのであるから、私たちは、空間がまずあって、物がそこに入って物が現われる、というように考える。しかし、ハイデガーの考えはそれとは異なる。物が際立った処となり、そこから空間が成立する——ただし、物理的な意味での成立ではなく、あえて言えば現象学的な意味での成立であるが——というのである。火壇、聖柱、あるいは山といった固定点があってコスモス的な秩序が成り立つといったような、M.エリアーデが説く「聖なる空間」に近いものを読み取ることができよう⁸。とくに四方域の形象は「聖なる空間」を想起させる。しかし「俗なる空間」も、純然たる均質空間ではなく、物が現われること、すなわち物が物となることを通じて、空間が開かれるのではないか。物があってこの世界は秩序づけられているのではないか。もしも物が現われる以前の状態があるとすれば、私たちには、物は他の物と並列して融けあってしまう、また空間は空間としては分からないはずである。

ハイデガーは、Ⅱ節の後半において、処と空間の関係はいかなるものか、そして人間と空間のかかわりはどのようなものになるのかという、二つの問いを立てて、考察しようとする。その議論がどのようなものか、順番に見ていこう。

3. 空間の諸相

まずは処と空間の関係についてであるが、注目されるのは、両者の関係というよりも、論じられる「空間(Raum)」概念が極めて多義的であり、幾層もの空間が語られる点である。冒頭で触れたように、ダルムシュタットの会議のテーマは、「人間と空間」であった。ハイデガーはこの主題にある「空間」概念の多義性を見極めようとしているかのようである。

彼は次のように言う。「橋は一つの処である。そのような物として、橋は空間を許し、その空間に大地と天空、神的な者たちと死すべき者たちが入れられている」(GA7, 157)。処と空間の関係は、上で見たように、処が空間を許す、つまり成立させるというものである。そして、ここで言われる「橋によって許された空間(der von Brücke verstattet Raum)」(GA7, 157)が、空間としては、根源的なレベルのものであるように考えられる。この「橋によって許された空間」は、「多様な広場・余地(Plätze)を含んでいる」(GA7, 157)とされ、これらの広場・余地は、測量可能な距離が成り立つ、「単なる地点(Stellen)として措定される」(GA7, 157)。ここにおいて、根源的な空間からすると派生的なものが出来上がるというのである。それは、「地点によって明け渡されたもの」であり、「ある固有の種類の空間」である(GA7, 157)。ハイデガーは、この空間をラテン語の《spatium》であると言い、それを「間の空間(Zwischenraum)」とも言い換える(GA7, 157)。ちなみに、《spatium》は英語の《space》の語源になるものであるが、私たちが日本語で「スペース」(「車を停めるスペースがない」と言う時のような)と呼ぶものを考えればよいであろう。「ここでは、人間と物との近さと遠さは、単なる隔たり、間の空間の距離となりうる」(GA7, 157)。つまり、質的な近さと遠さではなく、量的な距離になるということである。また「単に《spatium》として表象される空間においては、橋は、或る地点にある単なる何かとして現われる」(GA7, 157)と述べられる。ここで「間の空間」が《spatium》として表象されると言われていることに注意したい。この空間は表象されるものであり、この空間においては「橋」はもはや「処」としては現われないのである。

このような「間の空間」からさらに派生的なレベルが考えられる。ハイデガーによれば、「間の空間としての空間から、単なる広がり、高さ、幅、深さに関して取り出される。このようにして抜き取られたものを〔…〕、我々は、三次元の純粋な多様性として表象する」(GA7, 157)。そして、「この多様性が明け渡すものは、もはや《spatium》でもなく、かろうじて、《extensio》、延長にすぎない」(GA7, 157)。ハイデガーは、このようにして出来上がる空間を「延長としての空間」と呼ぶ(GA7, 157)。それは、さらに一段階、抽象的なレベルの空間である。

だがハイデガーは、「延長としての空間は、もういちど解析的・代教諸関係へと抜き取られる」(GA7, 157f)と言い、この空間からも派生するものを考える。「これら諸関係が明け渡すものは、任意の多次元をとまなう多様性についての、純粋に数学的な構成である。こ

の数学的に明け渡されたものが、空間〈そのもの〉(《der》Raum)と呼ばれる」(GA7, 158)。延長としての空間から、「空間〈そのもの〉」と呼ばれる、純粋に数学的幾何学的な空間が出来上がると言うのである。ハイデガーによれば、この空間〈そのもの〉は、「いかなる空間や広場も含まない」し、「我々は、空間〈そのもの〉において、橋のような処としての物を見出すことは決してない」(GA7, 158)。これに対して、「処によって明け渡される諸空間においては、つねに、間の空間としての空間が存しており、さらに、この間の空間においては、純粋な延長としての空間が存している」(GA7, 158)。こうした発言から、明らかに根源 - 派生関係において種々の空間を捉えようとしている。今一度整理すると、「橋によって許された空間」→「間の空間」(スペース)→「延長としての空間」→「空間〈そのもの〉」という関係である。

数学的幾何学的な空間こそ「空間そのもの」であるとし、こちらのほうを最も基本的で本源的なものと考えてしまうことが、住むことの意味の忘却にもつながっているとしても、ハイデガーは主張したいようにみえる。彼は、「処によって明け渡される」空間、つまり「橋という物」に基づく空間について、「我々が日常通り抜ける空間」(GA7, 158)という言い方をしている。それゆえ、それは、現象学的な「生きられる空間」に近いものであると考えられる。このような空間を主題にすべきであり、このような空間に人間はどのようにかわっているかを思索しなくてはならないと、ハイデガーは考えるわけである。

4. 人間と空間

では、その空間と人間とのかかわりはどのようなものと考えられるのか。ハイデガーはまず、「空間は人間に対立するものではない。空間は外的な対象でもなければ、内的な体験でもない。人間があってその外部に空間があるのではない」(GA7, 158)と言う。では両者をどう捉えるのかという点、人間の在り方から考えていこうとするのである。ここでハイデガーが捉える人間は、「諸々の物のもとの四方域のなかに滞在すること(den Aufenthalt im Geviert bei den Dingen)」(GA7, 159)と規定される。ポイントは「物のもとに」ということである。人間が物のもとに滞在しており、物のもとで存在しているということである。それは、たとえその物が手の届かないような遠くにあるとしても、その物のもとにあることには変わらない。ハイデガーは、その点について、「ハイデルベルクの橋」という例を出して説こうとする。この箇所はハイデガーの空間論を理解するうえできわめて重要である。

我々がいま——我々がみな——ここから、ハイデルベルクの古い橋のことを思う場合、かの処に思いをはせる思考は、ここに現前する人格における単なる体験ではなく、むしろ、件の橋へよせる思考の本質には、この思考がそれ自身においてこの処への遠さを持ちこたえること(durchstehen)が属している。我々は、ここから、その橋のもとで存在しているのであって、我々の意識の中の表象内容のもとで存在しているのではない。それどころか、我々は、ここから、あの橋と、橋が明け渡すものに、日常無関

心に川を渡ることで利用している誰かよりも、一層近くにいることができるのである。(GA7,159)

離れた橋のことを思う者が、日ごろ無関心に橋を利用する者よりも、橋に「近い」という場合、この「近さ」は、言うまでもなく、客観的に測定可能な「距離」としての「近さ」ではない。ならば、それは、内面的な「意識」「表象」の事柄であると普通は考えるであろう。つまり、遠く離れた橋のもので存在するというのは、意識の表象内容のもので存在するにすぎないと考えるであろう。しかしハイデガーはそれを否定する。「ここ」から「そこ」橋のもので存在する」のであると。ハイデルベルクの橋へ思いをはせる思考の本質には、「処への遠さを持ちこたえることが属している」というのだが、この「持ちこたえる(durchstehen)」とはどういうことなのか。それは、ここではないところを近づけることであり、ここではないところとして近づけることである。言い換えれば、「遠さ」と「近さ」を持ちこたえることであり、近さと遠さの力動的な成り立ちの中に「立つ(stehen)」ことにほかならない。「近さ」と「遠さ」という意味をもった「空間、の奥行に開かれ、それを保持することであろう。

死すべきものたちが存在するとは、住みつつ、物や処のもので彼らが滞在することに基づいて、空間を持ちこたえることを意味する。死すべきものたちが彼らの本質にしたがって、空間を持ちこたえる(durchstehen)からこそ、彼らは空間を通り抜けること(durchgehen)ができるのである。(GA7, 159)

私たちは、常に「物」と交渉し、その「間」に近さと遠さという奥行を保持しながら、存在する。空間を通り抜けて「行く(gehen)」ことが成り立つためには、そのような近さと遠さの動的な奥行を常に携えて「立っている(stehen)」ことが必要なわけである。

ここでの「持ちこたえる」とほぼ同様の議論が、『ツォリコーン・ゼミナール』でも行われるので、それを見てみよう。その議論は、1965年3月12日の日付の個所にある。精神科医や臨床心理学者が参加者である点を考慮してのことであろうが、この個所では、「再現前・思い浮かべること(Vergegenwärtigung)」がテーマにされ、チューリッヒ中央駅を思い浮かべるといふ事例について考察される。ハイデガーによれば、「再現前は、...のもとの存在(Sein bei...)という性格」(ZS, 90)を持ち、「存在者のもとの存在(Sein bei Seiendem)の一つの仕方」(ZS, 92)であるとされる。

車でチューリッヒ中央駅に行くためには、駅を思い浮かべなければならない。そうでなければいつまでもたっても駅に着くことはできない。この「再現前において、そして再現前のおかげで、私たちはまさにすでにそれなりの仕方ですべての存在している」(ZS, 93)のだと言う。けれども、「この「...のもとの存在」は、思い浮かべている間、私たちが

現実的に、あるいは考えのうえだけでも、駅の前に立っているということを意味しているのでは決してない」(ZS, 93)。つまり、離れた駅のもとで存在するというのは、単なる観念上のレベルにすぎないのではないというのである。「ここに存在していることにおいて、私は、駅を再現しつつ、つまり、再現前するという仕方でももちろんあるが、駅のもとで存在しているのである」(ZS, 93)。こうしてハイデガーは、根本的な存在様式として、人間は、ここにいつ、ここにはないところにある物のもとにいるのだと主張してやまないのである。

私たちがここに存在するということは、その本質にしたがって、私たち自身がそれではないところの存在者のもとで存在することなのである。(ZS, 93)

私たちが物のもとで「ここに存在する」ということそれ自体が、端的にすでに常に、遠くにあつて身近には現前しない物のもとで「あそこに存在する」ということなのである。(ZS, 94)

普通の考え方からすると、奇妙で不合理な言説にみえるのであるが⁹、これは事物的存在者(物体)とは異なる人間存在の特徴として理解する必要がある。ハイデガーは、靴がドアのそばにあるという例を持ち出しながら説明する。靴がドアのそばにあるというのは、二つの事物が空間的に相並んでいることであるが、それに対して、「私たちが物のもとでここに存在しているさいの「もとでの存在(Sein bei)」は、現前するものに対して開かれて立っている(Offenstehen für)という根本動向を持つ」(ZS, 94)と言うのである。「私たちが開かれて物のもとでここに存在するということがそのまま、再現しつつ、チューリッヒ中央駅のもとで開かれて立って存在するということである」(ZS, 95)。ここで語られる「開かれて立つこと」は、事態としては、「建てること、住むこと、思索すること」で言われる「空間を持ちこたえる」に重なるものと受け取ってよいであろう。それは、近さと遠さの力動的な間に立ち、単なる表象のレベルではなく、現実的な実存のレベルで、開かれて、「あそこ」にある「物」へかかわっていることである。

そして、いずれの議論においても、ハイデガーが「立つ(stehen)」という語に何らかの重要な意味を持たせようとしていることも明らかであろう。大地の上——ということは天空の下——に存在するものは、人間以外の存在者もそうであるが、その中でも人間は直立して平らな床の上に存在することを特徴とする¹⁰。しかし、人間が大地の上に立つということは、ただ地面の上に直立しているだけではない。その「立つこと(stehen)」は《durchstehen》であり《offenstehen》である。《durchstehen》《offenstehen》が、人間が空間へとかかわるその仕方であり、「住む」ということである。それだから、「人間と空間との関係は、本質的に考えられた住むことにほかならない」(GA7, 160)とされるのであろう。この《durchstehen》は物(=処)なしにはありえない。物(=処)とともに

《durchstehen》はなされる。それによって空間が生起する。処はまた、物が事物的存在者として実在してありさえすれば処となるというのではなく、物が物となる(dingen)という事で処となる。物が物となることは、すべて人間の働きによるものではないであろうが、人間の側でなしうることもあるであろう。それが「建てる」ということである。

5. 建てるとは

では最後に、「建てるとは何か」ということについて、この講演におけるハイデガーの言わば「解答」を押さえ、それに対する若干の考察を試みる。

「建てること」の意味が最も根源的には「住むこと」であるとするのは、最初に見たとおりであるが、このテキストの後半では、物を「築く」という意味での「建てること」がテーマとされてきた。その意味での「建てること」について、ハイデガーは、「処」を「築き」、それゆえ「空間を樹立し接合する」と言及する(GA7, 160)。そして、建てられた物が四方城を大切に守るという思想を述べるわけだが、ここでは、「産み出すこと(Hervorbirigen)」について紙幅をさいて語られることに注目したい。

彼によれば、橋のような「物を産み出すことが、建てるということ」(GA7, 160)であり、建てることは、「産み出すこと」「として遂行される」(GA7, 161)。この発言自体はごく当たり前のことであるが、この「産み出すこと」の含意が、彼の技術論でも広く知られているように、独特である。このテキストでは次のように語られる。すなわち、「産み出すこと」はギリシア語のティクトーに相当し、その名詞形がテクネーである。その意味するところは、芸術でも手仕事でもなく、「或るものを、あれこれのものとして、あれこれの仕方、現前するものへと現われさせること(erscheinen lassen)」(GA7, 161)であり、「現われさせる」とは、「産み出された物を、すでに現前しているものにおける一つの現前するものとして、差し出す(anbringen)」(GA7, 162)なのである。これらの発言を言い換えると、物を作るということは、すでに現前しているものたちの間へ、あるいはそれらの前へ、作られた物と言わば「列席させる」ことを意味すると言えよう。

J.マルパスは、ハイデガーのここでのテクネーの議論を受けて、建てるものが「世界を分節する生産活動の様態」¹¹であると言っており、これは的確な指摘である。建物を建てることによって住む空間が分節され、空間の意味が出来上がる。物を産み出すことにはすべてそのような働きがあるが、とりわけ建物を建てることには、その分節化がより顕在的なところがある。そのような分節化は現われさせる働きがあつてのことであり、それと一体化しているとも言えよう。

さて、ハイデガーはここから議論をさらに展開する。「建てることの本質は、住まわせること(Wohnenlassen)である。建てることの本質遂行は、処の空間を接合することによって、処を築くこと(Errichten)である。我々は、住むことを能くする場合にのみ、建てることができる」(GA7, 162)。このように言って、一軒のシュヴァルトツヴァルトの農家の例を取り上げる。その記述は、幾分文学的などところがあり、或る情緒をもたらすものではあるが、

その詳しい引用は紙面の都合で控えることにする。

彼がこの例を出すのは、住むことを能くするというその「能力(Vermögen)」——四方城を統一的に取り入れる能力ともされるのだが——が建てることの条件となっているのを示すためである。では、その「能力」なるものをどう理解すればよいのであろうか。おそらく、それは、単なる表層的な建築の技術ではなく、それを下支えするようなレベルのものであろう。通常、能力や技能は、個人が所有する何かのように考えられ、それを競ったりもするが、しかしそれらは、先人たちから受け継いだものである¹²。高度な技術だけでなく、歩行や走行のような身体の基本的な動かし方でさえ、他者から受け取ることなしにはありえない。そしてそこには、人間が置かれた環境からの制約があり、環境との応答のなかで能力が受け継がれる。伝統的な住居を産み出す技というのは、まさにその環境との応答において発揮される能力の最たるものと言えるだろう。ハイデガーに影響を受けた、C.ノルベルグ＝シュルツによれば、「建築の基本的行為とは、場所の「呼び掛け」を了解することにある」¹³。ハイデガーも「四方城の呼びかけ(Zuspruch des Gevierts)」(GA7, 161)と言うのであるが、その呼びかけに応じて建てる能力は、おそらくは、「大地を利用し尽くし」(GA7, 152)たり、「夜を昼に変え」(GA7, 152)たりするようなことをしないものであろう。

けれども、このような仕方ですむことの「能力」とシュヴァルツヴァルトの農家を理解してしまうと、それは伝統的建築だけを愛好する一種のノスタルジアであると批判することもできよう。ハイデガーはこうした批判も予想してか、次のように述べている。「シュヴァルツヴァルトの農家への指示は、このような農家の屋敷を建てることへ回帰すべきであるとか、回帰することができるとかを意味しているのではない」(GA7, 162)と。そうではなく、「既在している住むことに即して、その住むことがいかに建てることをなしたか(vermocht)を直観的に理解させてくれる」(GA7, 162)と言うのである¹⁴。

「住むことを能くする場合にのみ、建てることができる」、この「能力」は、伝統的建造物だけを作り続けるだけでなく、また新たに別様に産み出すことができるという能力でもあろう。ノルベルグ＝シュルツの評言をもう一度引くと、「ゲニウス・ロキを尊重するとは、古いモデルを複製することを意味しない。むしろ場所の同一性を決定し、常に新たな仕方ですそれを解釈することを意味するのである」¹⁵。つまり、場所の同一性はさらなる解釈に開かれているということである。そして、ここで「解釈」と述べられているのは、建てることがいわゆる建築の技術者だけのテーマではないように思われる。ハイデガーがこの講演で最も強く言いたいのは、「建てること」が、建築の専門家に限定されない、もっと広く、もっと根源的な人間存在にかかわるものであるということである。

「建てる」というのは、設計図を書き、土地を均し、建材を調達し、土台から柱、壁、屋根を建てるだけではない。そのような作業の背後にあるもの、人間が存在するその仕方、つまり住むこと全体が控えているのである。さらに言えば、建てることは、新たに作ることだけではない。保存することも然りなのであり、保存することも創造的なのである。建

て終えたものでも、不断に修繕し続けなければならない。言い換えれば、作るという営みを存続していかなければならないということである。そうだとすれば、建てることは、建造物を作り終えて終わりではない。それは不断に建て続けることであり、それは工具を用いて工作することにつきない、住むこと全体の営みなのである。

最後に一言付け加えると、ハイデガーは四方域を「大切に守る」ことが住むことの本質であると考えているのであるが、しかしそれはまた、死すべき者たちがある一定の範囲で、四方域によって守られている、あるいはそこまででなくても、建てられた物によって守られていることでもある。住むこと(wunian)が元来「平和へともたらされること」、「平和のうちにとどまること」であるとするならば⁶⁾、建てられた物あるいは産み出された物によって、人間がケアされている面もさらに考えていかなければならないだろう。

(金沢大学人間社会学域学校教育学類教授)

注

ハイデガーのテキストの引用略号は以下の通りである。

SZ: *Sein und Zeit*, Max Niemeyer, 1927(15. Aufl., 1979)

GA: *Martin Heidegger Gesamtausgabe*, Vittorio Klostermann, 1975-

ZS: *Zolliker Seminar*, Herausgegeben von Medard Boss, Vittorio Klostermann, 1987(2. Aufl., 1994)

1 年代順に並べると以下ようになる。

- ・中村貴志訳「建てる・住まう・考える」、『ハイデッガーの建築論——建てる・住まう・考える』中央公論美術出版、2008年、所収。
- ・大宮勘一郎訳「建てる 住む 思考する」、『ハイデッガー——生誕120周年、危機の時代の思索者』河出書房新社 (KAWADE 道の手帖)、2009年、所収。
- ・森一郎訳「建てること、住むこと、考えること」、『技術とはなんだろうか 三つの講演』講談社学術文庫、2019年、所収。

2 拙論「ハイデッガーの空間論——生起する空間」、『Heidegger-Forum 電子ジャーナル』vol.5, 2011年9月1日、1-10頁。

3 いくつか該当するところを挙げると、GA5,327,GA7,221,GA9,436,GA11,14,75 などである。

4 Otto Friedrich Bollnow, *Mensch und Raum*, W.Kohlhammer, 1963, S.38. (大塚恵一・池川健司・中村浩平訳『人間と空間』せりか書房、1978年、38頁。)

5 Bollnow, a.a.O., S.39. (同書、39頁。なおここで「地点」と訳された語は《Ort》である。)

6 Bollnow, a.a.O., S.39. (同書、39頁。)

7 Bollnow, a.a.O., S.43. (同書、43頁。)

8 ミルチャ・エリアーデ『聖と俗 宗教的なるものの本質について』風間敏夫訳、法政大学出版局、1969年、「第一章 聖なる空間と世界の浄化」を参照。

9 このようなハイデッガーの議論は、問題群として他の思想家とも共有できる。「私はここにとどまっているにもかかわらず、<よそにいる>こともできる」というメルロ＝ポンティの議論については、以

下の論文が参考になる。加國尚志「私は今ここで、あそこにいる——メルロ＝ポンティの身体論と空間論」、木村敏・野家啓一監修『空間と時間の病理 臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所、2011年、所収。また次のH.アーレントの断片も興味深い。「思いを寄せること＝距離を超えて何かに達すること、これこそ、表象と対立するとともに思い出とも対立する真の構想力である。」H.アーレント『思索日記Ⅰ 1950-1953』ウルズラ・ルッツ/インゲボルク・ノルトマン編、青木隆嘉訳、法政大学出版局、2006年、188頁。

- 10 建築学者の上田篤によれば、「わたしたちアシナガザルのすまいは、どんなに粗末なものでも、ユカだけは平らである、ということは、不安定な二足歩行がもたらした結果以外の何物でもないといえる」。上田篤・多田道太郎・中岡義介編『空間の元型 すまいにおける聖の比較文化』筑摩書房、1983年、37頁。本書には、中岡義介のものと同合わせ、「床」に着目した人間の空間の考察が収められている。
- 11 Jeff Malpas, *Heidegger's Topology Being, Place, World*, MIT Press, 2006, p.271.
- 12 このような事態を、ラフカディオ・ハーンが文学的に表現している。「…技芸はすでに受け継がれている。その指が、死者の導きにより、飛ぶ鳥、山々の霞、朝や夕暮れの色、小枝や春に咲き乱れる花々を描いてゆくのだ。何世代もの有能な職人たちから受け継がれた熟練が、今ここにひとりの芸術家の傑作の中へと甦るのである。」ラフカディオ・ハーン『新編 日本の面影』池田雅之訳、角川ソフィア文庫、2000年、21-22頁。
- 13 Christian Norberg-Schulz, *Genius Loci Towards a Phenomenology of Architecture*, Academy Editions, 1980, p.23 (加藤邦男・田崎祐生訳『ゲニウス・ロキ 建築の現象学をめざして』住まいの図書出版局、1994年、45頁。)
- 14 とはいえ、彼の言説全体には「ノスタルジア」という語で特徴づけられる面はあるであろう。そして、それを政治的な文脈で問題化することもできよう。こうした問題については別稿の課題としたい。
- 15 Norberg-Schulz, *ibid.*, p.182 (同書、316頁。)
- 16 建築空間を論じる文脈において、例えば、ノルベルグ＝シュルツは、「建てることの元型的な行為は *Umfriedung* すなわち、囲い込むことである」としている。Norberg-Schulz, *ibid.*, p.23. (同書、44頁。) また、O.F.ボルノウも「ひとがそのなかに住んでいる「Frieden [平安]」は、居住領域の「*Umfriedung* [垣、柵をめぐらすこと]」と関連している。それゆえ、平安のうちに住まうことができるためには、防護用の外壁と安全に庇護する屋根とを必要とする。これらのものによって、たんなる住居は本来の意味での家屋となるのである」と述べる。Bollnow, *aa.O.*, S.129. (同書、124頁。) 囲い込みを基本とする建物がもたらす平安・平和は、身の安全や心理的安心だけでなく、心身の回復と健やかさの条件にもなっているにちがいない。(なお、細かいことだが、ハイデガーは『講演論文集』および『全集第7巻』所収のテキストでは、*«einfrieden* [囲う]) という語を用いている。)